

A black and white portrait of Matsuyama Seiko, a woman with short hair, wearing glasses and a patterned scarf. She is looking slightly to her left.



曾山 静子

離れて

笠原 康浩

日本との時差

まず私がこの研修旅行に参

がいか動機にといふと 石川の内容にもたいへん興味をもつたのだが、他の参加者には申し訳ないが、お金もなく外国にいったことのない学生にとって時間のとれる今のうちに一度ヨーロッパへ行つて異文化というものを肌で感じ取

うだつたかといふと、私は現地で初めて日本語がしやべれない純粹の外国人の人々と会話をしたのであるが、あれだけ中・高・大学と勉強した英語。なかなか本番となるとし

やべれないものである。そこで役に立つたのがジエスチヤーである。英語がわからぬ人と意思の疎通をとる時におさら便利であった。おかげで、こちらの言わんとする

ドイツの小学校で「イジメ」の話を校長先生がされた時もやはり日本とは違うと感じた。ちなみにドイツではないといふ。では他の世界の国々ではどうなのだろうか?日本だけなのだろうか?ドイツの場合公用語だけでも、ドイツ語、フランス語、イタリア語と3つあり、

りにはうまく会話を楽しめた。

また帰つてきても特に私の頭の中に残つてることと、うと文化の違いであろう。たとえばあちらの人達は大学を決める時、大学の名前で決めるのではなく、どこの大学にどんな教授がいるかで決めるという。そして確か大学へ行くにはお金がかからず、誰でもどこの大学へでも入学できるが、そのかわり卒業はかなり難しいと、現地の日本の方々が言つていた。これを日本を比べてみると大きな違いがある。以前留学生が言つていたことを思い出す。“日本の大学は入学するのは難しいが、そのわりには卒業するの簡単だ”と。

旅行だつたら、全然ドイツ語に触れずに通りすぎてしまつた。ドイツにおける研修は、フランクフルトのゴミのリサイクル工場と、ミュンヘンの小学校の二ヶ所でした。

さて最初の工場見学ですが、人口68万のフランクフルトは、ドイツで最も近代化の進んだ都市の一つで、古い物の好きなドイツ人からは「ドイツで最も格好悪い町」と、言われているそうです。この町で通訳してくれたのは、眼鏡をかけたきびきびした日本女性で、バスの運転手のウイリーさんに命令形で「右へ行って」とか言つたりして、ちよつとどきどきさせられました。工場で説明と案内をしてくれたのは、「ゴミ博士」と自称する若い男性で、なんとのシャワーの中で、肯定文と否定文の区別がやつとつく、といった位の私でしたが、ただもう嬉しくて仕方ありませんでした。

見学である。大学で環境の勉強をしているので、世界に先駆けてゴミの有料化（一袋50～100円の袋を購入し、それにゴミを入れて回収してもらう仕組、日本は税金で回収・処分している）を行い、エコマーク・エコビジネス（環境ビジネス）、包装品無料回収のDSD社、ミドリの党（政

せて4つの言語がある。日本ではそれだけでいじめの問題が起きかねない。なぜなのだろう。これを機に私なりに考えた結果、ドイツの場合はいろんな人種が往来しているヨーロッパ大陸に位置していふため、生まれた時から周囲には自分と違った人々が当たり前のようにいて、特別自分と違つたからといってその人を特別視することはないかと思うし、日本と比べ集団行動が少なく個人の考え方を尊重し、また教育（特に道徳・倫理・心理学）が進んでいる。このような点にもヒントが隠されているのではと考える。

工場に運び込まれて処理・再生されるまでが、焼却装置の機能等と合わせて説明されました。ゴミ博士の最も言いたかったのは「ドイツ人には、モラルがある」ということでした。回収の時点でのゴミの選別率は98%とのことです。ドイツでゴミのリサイクル運動を支えているのは、緑の党だということでした。80年代初めに、連邦議会に緑の党が進出してから、環境問題に対する人々の意識が急に高くなつたと言われています。

さて次の研修はミュンヘンの小学校。三分岐型の教育制度。落第は日常茶飯事。大学を出ても就職に有利ということはないので、進学率は非常に低い。などの事情は、本で読んで予備知識があつたので、言つてみれば事実確認の研修でした。出迎えてくれた校長先生は、ふたことめにはミュンヘンのビール祭りの話ををするビール好きで、もしかして校長室にはビールが隠してあるんじやないかと心配しましたが、そんな事もなく

やリサイクル促進など相乗効果を生み、さらなるゴミの減量化につながるという意味で、私はゴミの有料化に対して賛成であり、ドイツにみならつて日本も今以上にどんどんこのシステムを取り入れていくべきである。

とつとびぬけている国ドイツへ行けたことは私にとってラッキーであった。今、この立場の不足の問題もからんでゴミ有料化が注目を集める。ゴミの有料化を行えば当然お金を払っても袋を購入するため、ゴミを出すのにもお金がかかるという認識が生まれて節約の意味も含めゴミの量も減少してくる。ここで言れてならないのが有料化により一般の人々にゴミという頃は考えもしないことに関心がわいてくるのだ。消費税導入時、国民が消費税について考えたようにゴミについて考えるのである。そうすることにより無駄な過剰包装の減小

飾られていました。日本人たちはよく来るけれど、言葉が大きな壁になっていて、情報の交換が難しいとのことでした。

ところで、バスの運転手のウイリーさんは、ドイツ人だけれど英語が上手で、殆んど一日中、添乗員の北川さんにプロポーズしていました。運転席とは、席ひとつ隔てただけなので、二人の会話は半分解らないながらも、大部分聞こえてきて抱腹絶倒でした。

ヒヤリングの勉強をしておけばよかつた。その北川さんは、学生時代にホームステイを経験したそうで、どうしても毎日英語を話さなければならぬ事態になり、一時はノイローゼだったそうです。人間追い込まれなければ、大成しないのかもしれません。

さて追い込まれてもだめだった実例を、私事ですが紹介させて下さい。まずひとつは、ミュンヘン空港で買物をした時の事です。定価が解らなくて「これはいくらですか」と聞いてみました。店員さんは

徐々に変わっていくことに
ながつていくのではと考え
もおかしくはないのではな
ろうか。

望者全員が行けるという形なつたが、それはそれでたへんいいことなのだが、も少し村民の方々がこの研修について考えてみてよかつたではと思う。この内容でこお金でこんな所へ行けるだ。何かを変えるため、何を得るためわざわざこういた研修が組まれているのだ。私は研修に行って日常生活は得ることのできないこと、学んだ点でとても良かつたを感じている。どうしようか迷っている人はぜひ来年参すべきだし、21人中20歳前の人人が5人しかいなかつた、いうことも残念なことだとう。参加人数が定員オーバーして二倍、三倍の競争率にすることが、この小さな村

り言つてくれました。しかしながら、私の頭の変換能力は低い。「この中で相手の言葉を繰り返して、相手の頭の変換能力は低い。」
ていたら、店員さんもイラэрラしたらしく、隅に小さく書かれた定価を、ばしつと指してきました。すつかり気がついてしまった私は、始末するはずだった小銭ではなく、始めた紙幣を出してしまったのです。もうひとつはフランクルト空港で新聞を買った時のことです。ラックにしつかりとしてある新聞を、これだとばかりに抜き取つたら、それは一部ではなくて、一部の一部分だった。日本の物とは置方が少し違つていて、どうしたらいいのか解らず、すっかり気が動転してしまいました。「すみませんが」「あなたのお助けがほしいのです」といつた言葉を台所の壁に貼つて、一月以上も眺めて暮らしたのに、一言も出てこなかつた。ただ懇願するような顔で店舗さんの目をみる私でした。